

# 大阪社会運動協会の オーラルヒストリーについて

島西智輝・梅崎修・南雲智映

---

はじめに

- 1 大阪社会運動協会と『大阪社会労働運動史』
- 2 保存資料
- 3 雑誌連載と未公開音声資料

おわりに

## はじめに

本稿は、財団法人・大阪社会運動協会で開催され、現在、エル・ライブラリー（大阪産業労働資料館）にて保存されている社会労働運動関係のオーラルヒストリーの紹介を行う。

オーラルヒストリーとは、ヒアリング調査による口述資料の収集および口述資料を使った研究方法である<sup>(1)</sup>。口述という形で残された情報は、単に貴重であるだけでなく、文書資料が持っている偏りを調整する効果も持っていた。日本においてオーラルヒストリーという手法が注目されるのは、最近のことである。政治史などの分野では、伊藤隆や御厨貴らが政治家や官僚などの公人たちのオーラルヒストリーを開始し<sup>(2)</sup>、社会史などの分野では日本オーラルヒストリー学会が設立され、多くの研究者がオーラルヒストリーの報告を行っている。各学問分野におけるオーラルヒストリーの発展に関しては、大原社会問題研究所編（2009）が詳しい。

しかし一方で、オーラルヒストリーは古い手法でもある。オーラルヒストリーとは呼ばれなかったが、談話聴取、ヒアリング、インタビュー、聞き取りという手法は昔から行われており、なかでも歴史を対象とした調査はオーラルヒストリーと呼べるものである。過去に行われたオーラルヒストリーの整理や利用は現在のオーラルヒストリー研究の課題である。しかし、過去のオーラルヒストリーの整理は難しい。まず、オーラルヒストリーと題名に書いていないオーラルヒストリーの調査報告を検索することは難しい。くわえてオーラルヒストリーは、テープ起こしという多大な労力

---

(1) オーラルヒストリーの歴史に関しては、Thompson（2000, 2003）や伊藤（2009）が詳しい。

(2) 政治学におけるオーラルヒストリーに関しては、御厨（2002, 2007）や清水（2003）が参考になる。また、2004年の『年報政治学』の特集はオーラルヒストリーであり、方法論やオーラルヒストリーを使った研究報告が編集されている。

や予算を必要とするので、調査が音声データのままで保存され、非公開となっていることも多い。

労働史におけるオーラルヒストリーに関しては、梅崎（2009）、山本（2009）、および吉田（2009）などがその収集と整理を試みている。しかし、これら論文で紹介されたオーラルヒストリーも網羅的とは言えない。

筆者らは、労働資料館や労働図書館に保存されている労働資料の調査を続けており<sup>(3)</sup>、今回エル・ライブラリーに保存されているオーラルヒストリーの存在を確認した。これらのオーラルヒストリーは、財団法人・大阪社会運動協会によって実施された資料であり、一部は簡易製本され、一部は音声記録のままに非公開で保存されている。簡易製本されたオーラルヒストリーはエル・ライブラリーにおいて公開されているが、外部の人間がそれらの資料をカタログあるいはデータベースの検索でオーラルヒストリーであると気づくのは難しいと言えよう。なぜなら、この資料名にも分類コードにも「オーラルヒストリー」という単語は入っていないので、キーワード検索においても「オーラルヒストリー」ではなく「聞き取り調査」と打ち込む必要があるからである。この聞き取り調査という単語では、検索された調査報告が現状分析なのか、歴史研究（オーラルヒストリー）なのかを区別できないのである。今回、エル・ライブラリーへの資料調査によってはじめてオーラルヒストリーの存在が確認できた。それゆえ本稿では、労働史研究におけるオーラルヒストリーの利用を促すためにも、これらオーラルヒストリーの内容を紹介したい。

本稿の構成は以下の通りである。続く第1節では、大阪社会運動協会の設立の経緯と『大阪社会労働運動史』の概要について説明する。第2節では、保存されているオーラルヒストリーを分野ごとにかけて説明する。第3節では、雑誌に掲載されたオーラルヒストリーと未公開音声資料を説明する。最後は、まとめである。

## 1 大阪社会運動協会と『大阪社会労働運動史』<sup>(4)</sup>

大阪社会運動協会（略称：社運協）は、1978年に労働組合・労働福祉事業団体・研究者・弁護士などにより設立された公益法人である。主要事業は以下の4つである。(1) 大阪産業労働資料館（現在のエル・ライブラリー）の管理運営、(2) 『大阪社会労働運動史』の編纂と社会・労働関係資料の収集・保全・公開、(3) 大阪社会運動物故者顕彰塔の管理および社会運動物故者追悼式の挙行、(4) 「大阪の社会労働運動を伝承する同志会」<sup>(5)</sup>の運営、である。この財団の特徴は、資料の収集・保全管理と、運動史の刊行を第一の目的としている点であろう。もともと労働団体の手によって1970年に建設された大阪社会運動顕彰塔を、総評・同盟・中立労連に分裂していた労組や社会運

---

(3) 労働史の資料に関する研究会の成果は、その一部（1回から5回まで）を『労働史・資料研究会オーラル・ヒストリー』としてまとめている。

(4) 本節の記述は、大阪社会運動協会のホームページ（<http://shaunkyo.jp/>）とエル・ライブラリー館長の谷合佳代子氏へのヒアリング調査（2009年2月24日）を参考にした。快くヒアリング調査を受けていただいた谷合氏に、この場にて感謝申し上げます。なお、谷合氏に対するヒアリング調査の記録は、『労働史・資料研究会オーラルヒストリーⅡ』として公開する予定である。

(5) もともとあった「戦後活動家の会」と「戦前の解放運動を守る会」の二つの団体がまとまった団体である。

動団体が超党派で管理・運営しており、その顕彰塔常任理事会が顕彰塔の管理運営のための専任機関の設置を提案したのが大阪社会運動協会のはじまりである。その意味では、そもそも設立の経緯としても歴史資料の調査・保存は組織目的であったのである。

財団設立と同時に『大阪社会労働運動史』刊行のための準備が進められ、蔵書家からの寄贈資料の受け入れもはじめられた。代表的な個人文書として、高田鑑造の文書と大阪社会運動協会理事長で大阪総評議長である中江平次郎の文書がある。

その後、数回の理事会を経て財団法人大阪社会運動協会では、1981年に『大阪社会労働運動史』発刊計画案が示され、監修者として渡部徹、小川喜一、西村豁通の三名が承認された（代表監修は渡部氏である。なお、小川監修者は急逝され、木村敏男大阪市立大学教授が後任となった）。また、編集委員会を設置することも決まり、常任編集委員長は中江平次郎理事長が兼務、委員には社運協理事、大阪府・大阪市担当職員、労組・社会運動活動家OBらが就任した。現在までに刊行されている『大阪社会労働運動史』（全9巻）の監修者と時期区分は以下の通りである。

第1巻 戦前篇（上） 渡部徹，木村敏男監修

第2巻 戦前篇（下） 渡部徹，木村敏男監修

第3巻 戦後篇 西村豁通，木村敏男監修

第4巻 高度成長期（上） 西村豁通，木村敏男，中岡哲郎監修

第5巻 高度成長期（下） 吉村励，中岡哲郎監修

第6巻 低成長期（上） 中岡哲郎，竹中恵美子，熊沢誠監修

第7巻 低成長期（下） 中岡哲郎，竹中恵美子，熊沢誠監修

第8巻 転換期 中岡哲郎，竹中恵美子，熊沢誠監修

第9巻 世紀の交差 玉井金五，宇仁宏幸，高松亨，服部良子，久本憲夫企画

この運動史刊行のためにヒアリング調査が行われ、その記録がエル・ライブラリーに保存されていることが確認された<sup>(6)</sup>。ただし、この編集委員会が設置される前からも座談の形でのヒアリング調査は行われていた。そもそも大阪社会運動協会設立以前から、社会・労働運動に尽力された人々の親睦会である「戦前の解放運動を守る会」が存在し、定期的に会合を開いていた。協会設立後は、同会と戦後の労働運動家OB会である「戦後活動家の会」の事務を担当している。なお、二つの会は1990年に合同し、「大阪社会運動活動家の会」として出発し、さらに2006年には、大阪社会運動事跡録の編纂などを新たな任務として「大阪の社会労働運動を伝承する同志会」（略称「同志会」）へ改称した。

これらの活動記録の所在は現時点では不明であるが、後述するように、大阪労働運動史研究会という組織が行ったオーラルヒストリーの一部は、同会が編集・発行していた『大阪労働運動史研究』で読むことができる。

---

(6) 谷合佳代子氏ヒアリング調査（2009年2月24日）。

## 2 保存資料

表1に示したのは、エル・ライブラリーに保存・製本されている32冊のオーラルヒストリー・リストである。この表は、製本の表紙や最初の頁に載っている情報を整理したものである。語り手以外の情報としては、実施年や主なインタビュアーを示した。本稿では、これらのオーラルヒストリー・リストを分野別に整理し、それぞれの資料を紹介したい。労働組合運動、労働政治・労働行政、学生運動・平和運動・文化運動の三つに分けて、そのうち労働組合運動を(1)ナショナルセンター、(2)産業別労働組合・企業別労働組合、(3)婦人運動・労働福祉に分類した。

### 2-1 労働組合運動

#### (1) ナショナルセンター

周知のように、戦後日本で最初に結成されたナショナルセンターが産別会議である。産別会議に関するオーラルヒストリーはすでに蓄積されているが<sup>(7)</sup>、大阪社会運動協会でも資料12が残されている。三谷秀治は1946年に結成された産別関西地方会議の初代議長、産業復興会議の産別会議代表を務めた後、大阪府会議員(共産党)に転じた。

1947年の二・一ゼネストの中止を経て、産別会議で民主化運動が徐々に高まっていた。この時期までの戦後労働運動に関するオーラルヒストリーが、資料5と資料6である。井岡大治は大阪交通労組委員長を長く務めた後、1955年から衆議院議員(社会党)を務めた。『友と歩んで幾星霜』(井岡大治著、井岡大治伝記刊行委員会、1990年)という著書もある。村尾重雄は大阪一般化学産業労組の初代委員長を経て、第1回参議院議員選挙に当選した。渡辺忠は淀川製鋼労組の結成を主導した後、他の鉄鋼企業の労組結成も働きかけた。産別会議の地方組織でも積極的に活動し、産別大阪会議議長も務めた。椿繁夫は総同盟大阪連合会主事を経て総評全国金属委員長、大阪市議会議員、参議院議員(社会党)を務めた。『水脈遠く』(椿繁夫著、新時代社、1983年)などの著書がある。

二・一ゼネスト後、各ナショナルセンターは全国労働組合連絡協議会(全労連)を結成する。1948年に総同盟が脱退した全労連は1950年に団体等規正令によって解散させられたが、資料27は、全労連解散以降の産別会議の活動に焦点をあてたオーラルヒストリーである。小西節治は1948年に結成された全日本金属産業労働組合(大金属)の関西地方協議会オルグを務めた。『遠い日近い日』(小西節治著、私家版、1995年)などの著書がある。巢張秀夫は淀川製鋼労組書記長を経て、産別金属大阪の常任オルグ、総評全国金属の執行委員などを務めた。『組合運営』(巢張秀夫著、泉州労連労働学校・運営委員会(第1期)、1983年)という著書がある。

産別会議の関西地方組織に関しては、資料8のオーラルヒストリーがある。大朝道丸と本田誠一は産別関西地方会議で活動した人物で、大朝は全通近畿地区本部委員長も務めた。旧全評(日本労

---

(7) 法政大学大原社会問題研究所編『証言 産別会議の誕生』総合労働研究所、1996年；同研究所編『証言 産別会議の運動』御茶の水書房、2000年。日本労働研究機構編『戦後労働運動の歴史：分裂と統一』日本労働研究機構、2003年にも数名の証言が残されている。

表1 エル・ライブラリー所蔵オーラルヒストリーリスト

No.	分類	資料名	実施日付	対象者	聞き手
1	学生運動・平和運動・文化運動	大岡欽治氏	1979年12月2日	大岡欽治(演劇家)	桑島南海士,久保在久,三輪泰史,田中はるみ(編集)
2	産別・企業別労働組合	私鉄関西西地連会取り	1980年3月8日	軌在義行(大阪地評) 津輪喜代男(初代私鉄総連議長) 山口丈太郎(元阪急労組) 岸本幸喜(元山陽労組) 壇嘉次(元京阪バス労組)	根木(私鉄関西西地連会議長)
3	労働政治・労働行政	末中勘三郎氏聴き取り	1980年4月19日	末中勘三郎(元大阪府会議員)	桑島南海士,久保在久,広川裕秀,三輪泰史,田中はるみ
4	労働政治・労働行政	古野しく氏聞き取り調査	1981年2月8日, 1982年11月5日	古野しく(元大阪市会議員)	小山仁示(三輪泰史・編集田中(1回)),渡部徹・滝茂(編集田中(2回目))
5	ナショナルセンター	終戦直後から2-1までの大阪の労働運動	1982年7月3日	井岡大治(元大阪交通労働運動組合長) 榎繁夫(元総同盟大阪連合会正事) 村尾重雄(元総同盟大阪一般化学労働組合長) 渡辺忠(元関西産別議長)	西村節通,大谷強,辻橋茂,山本正之(執筆),中江平次郎,河野益夫,北橋正一,原はるみ(事務局)
6	ナショナルセンター	敗戦直後の大阪労働運動の再建(戦後編第1回)	1982年7月3日	井岡大治(元大阪交通労働運動組合長) 榎繁夫(元総同盟大阪連合会正事) 村尾重雄(元総同盟大阪一般化学労働組合長) 渡辺忠(元関西産別議長)	西村節通,大谷強,辻橋茂,山本正之(執筆),中江平次郎,河野益夫,北橋正一,原はるみ(事務局)
7	婦人運動・労働福祉	敗戦後の大阪婦人運動	1982年8月27日	松本貞枝(婦人民主クラブ) 蔵田しづえ(婦人民主クラブ) 神戶敏子(全大阪主婦連盟) 桂あや子(元大阪交通労働組長部長) 佐賀節子(姫評大阪婦人協) 宮内順子(元地評婦人部副部長)	西村節通,玉井金五,土井乙平,能塚正義(執筆),中江平次郎,北橋正一,原はるみ(事務局)
8	ナショナルセンター	産別会議関西西地方会議の活動	1982年10月30日	大朝道丸(元全通近畿地区本部委員長) 北田辰之進(元産別会議関西西地方会議副議長) 本田誠一(元全通近畿地方本部副委員長) 渡辺忠(元産別会議関西西地方会議議長)	西村節通,大谷強,辻橋茂,山本正之(執筆),中江平次郎,北橋正一,原はるみ(事務局)
9	学生運動・平和運動・文化運動	戦後大阪の平和運動	1983年1月21日	内海義夫(大阪市立大学) 山口圭一(元阪平和守る会) 岡智三(元中労協会) 軌在義行(大阪地評) 岡井明(大阪地評) 佐藤次次(大阪地評)	西村節通(監修),能塚正義,辻橋茂(執筆),中江平次郎(常任編集委員長),北橋正一(事務局)
10	産別・企業別労働組合	繊維労働運動について	1983年2月4日	大西優(元綿紡労組委員長) 赤坂常之進(元東亜紡織労組委員長) 西守操一(元帝國産業繊維労組委員長) 佐野正三(元日紡労組委員長) 福沢寿夫(元日紡会連書記)	西村節通(監修),中江平次郎(常任編集委員長),辻橋茂,山本正之(執筆),北橋正一(事務局)
11	ナショナルセンター	日労会議について	1983年2月18日	福沢寿夫(元日紡会連書記) 渡辺正三(元日紡労組委員長) 菅藤一(元日紡製業労組委員長)	辻橋茂(執筆),山本正之(執筆),大谷強(執筆),中江平次郎(常任編集委員長),西村節通(監修),北橋正一(事務局)
12	ナショナルセンター	産別会議について	1983年3月4日	三谷孝治(元産別関西西会議議長)	西村節通(監修),辻橋茂,山本正之,安保剛夫(執筆),中江平次郎(常任編集委員長),北橋正一(事務局)
13	学生運動・平和運動・文化運動	昭和20年代の平和運動について	1983年3月25日	大津静夫(元大阪地方民主主義擁護同盟準備会事務局長)	西村節通(監修),中江平次郎(常任編集委員長),辻橋茂(執筆),北橋正一(事務局)
14	労働政治・労働行政	占領下の労働行政	1983年4月8日	後藤清(初代労委委員) 山口武(元労方労務事務所長) 片岡重治郎(労委審査課長) 大森一男(元天満労働者) 井岡大治(元大阪交通労働運動組合長)	西村節通,辻橋茂,安保剛夫,中江平次郎,北橋正一
15	産別・企業別労働組合	産別金属について	1983年4月27日	原全五(産別金属本部オルグ) 小西節治(大金関係西地協事務局長) 小森泰雄(大金関係西地協常任オルグ) 大出清(産別金属大阪支部常任執行委員)	中江平次郎(常任編集委員長),西村節通(監修),辻橋茂(執筆),北橋正一(事務局)
16	産別・企業別労働組合	産別化学について	1983年5月21日	喜多崎龍次郎(元全関西化学労組連合会書記) 磯部直一(元全日本化学労組関西協議会執行委員) 奥野芳三(元産別全関西化学労組連合会事務局長)	西村節通(監修),中江平次郎(常任編集委員長),辻橋茂(執筆),北橋正一(事務局)
17	ナショナルセンター	新産別の大阪での運動について	1983年6月10日	三戸信人(新産別本部顧問) 福岡知之(松下電器労組委員長) 岩田秀男(新産別近畿東海労組委員長)	西村節通(監修),中江平次郎(常任編集委員長),辻橋茂(執筆),北橋正一(事務局)
18	産別・企業別労働組合	電気産労組について	1983年7月26日	三上修一(新産別京都連通) 甲田一郎(電気産大阪支部中央執行委員) 高橋幸一(電気産大阪支部委員長)	西村節通(監修),中江平次郎(常任編集委員長),大谷強,辻橋茂(執筆),北橋正一(事務局)
19	産別・企業別労働組合	大阪における国鉄労働組合の分裂	1983年12月4日	田村弘(国労大阪地方本部青年部長) 横手真夫(国労大阪地方本部副委員長) 田中包治(国労市大阪府協議会議長)	中江平次郎(常任編集委員長),辻橋茂(執筆),北橋正一(事務局)
20	ナショナルセンター	大阪総評の結成と総同盟大阪連合会の分裂	1983年12月20日	中江平次郎(大阪総評議長) 榎繁夫(元総同盟大阪連合会正事)	西村節通,辻橋茂,大谷強(執筆),北橋正一(事務局)
21	産別・企業別労働組合	昭和20年代の私鉄関西西地連について	1986年2月27日	西村地久治(元阪急労組委員長) 上原富夫(私鉄総連関西西地連書記) 美本憲士(元京阪労組)	西村節通(監修),辻橋茂,安保剛夫(執筆),中江平次郎(常任編集委員長),北橋正一(事務局)
22	婦人運動・労働福祉	終戦直後の婦人労働運動について	1986年6月13日	安家塔子(元総同盟大阪連合会婦人部長) 飯田好子(元私鉄総連婦人部長) 桂あや子(元大阪交通労働組長部長) 西川好子(元日労会議婦人部長(昭和7ルニ)) 松尾光子(元日労会議婦人部長(日本7ルニ))	西村節通,土井乙平,辻橋茂(執筆),中江平次郎(常任編集委員),北橋正一,谷合佳代子(事務局)
23	婦人運動・労働福祉	敗戦直後の大阪動婦連と生理休暇問題	1986年7月18日	関久子(元大阪労働婦人連盟初代委員長) 桂あや子(元大阪交通労働組長部長) 村尾重雄(元参議院議員) 榎繁夫(元参議院議員)	中江平次郎(常任編集委員長),土井乙平(執筆),北橋正一(事務局)
24	労働政治・労働行政	昭和二十年時代の社会党の選挙	1986年8月6日	井川章(日本生活協同組合連合会常任顧問) 山上義廣(大阪府生活協同組合連合会会長理事) 中田文治(元大阪労働協議員) 柴田植男(大阪労働協事務局長)	西村節通(監修),玉井金五,土井乙平(執筆),中江平次郎(常任編集委員長),北橋正一(事務局)
26	学生運動・平和運動・文化運動	昭和30年代の大阪における学生運動	1988年2月8日	小西昌博(元大阪府学業委員長) 西野市夫(元大阪府学業委員長) 井上淳一(元大阪府学業委員長)	久保在久,佐藤次,辻橋茂,梁永厚(執筆),中江平次郎,北橋正一,谷合佳代子(社連協事務局)
27	ナショナルセンター	全労連解散後の産別会議について	1988年4月1日	小西節治(元大金関係西地協事務局長) 柴藤秀夫(元産別金属常任)	辻橋茂,久保在久(執筆),中江平次郎,北橋正一,谷合佳代子(事務局)
28	産別・企業別労働組合	昭和30年代の住友化学労働組合	1988年6月6日	吉川平治(元住友化学労組本部書記長) 岡田博(元住友化学労組委員長)	中国(監修),玉井,野口服部,山田(執筆),中江,北橋,谷合(事務局)
29	産別・企業別労働組合	昭和30年代の国鉄労働組合大阪本部	1988年8月9日	辻本滋哉(元新国労大阪本部委員長) 小浜忠勝(元国労大阪地本執行委員) 野田大(元国労大阪本部委員長)	安保,久保,辻橋(執筆),中江,北橋,谷合(事務局)
30	ナショナルセンター	全労会議と岡電労組	1988年9月12日	岡田三郎(元全労大阪会議議長) 木田精一(元大阪地方同盟副書記)	柴本佐久保在久,辻橋茂(執筆),中江平次郎(常任編集委員),北橋正一,谷合佳代子(事務局)
31	産別・企業別労働組合	昭和30年代の郵政・電通労働運動	1988年10月6日	福井秀哉(元全日本郵政労組書記長) 土居下龍幸(元全通大阪地区本部委員長) 益田正(全通大阪中郵支部副委員長)	辻橋茂,久保在久(執筆),中江平次郎,北橋正一,谷合佳代子(事務局)
32	産別・企業別労働組合	大阪データ通信局に関わる諸問題	1992年9月18日	松葉謙一郎(元全通電通労組中央支部委員長)	中国野郎(「大阪社会労働運動史」第5巻監修者),高瀬宏幸(5巻執筆),中江平次郎(常任編集委員長),岡田元弘(事務局),北橋正一(テープ起こし)

資料)筆者作成。  
注) 聞き手は冊子に記載された代表的なものを抜粋して記した。

働組合全国評議会) 時代からの活動家であった北田辰之進は産別関西地方会議の初代副議長を務めた。渡辺忠は既に紹介したので省略する。

総同盟、産別会議とともに戦後初期に結成されたナショナルセンターとして日本労働組合会議(日労会議)がある。日労会議の結成を主導した組織は1946年結成の大阪地方労働組合会議(大阪製鎖、高田アルミ(のち昭和アルミ)、田辺製薬など)であり、大阪の労働運動と密接な関係を持っていた。この日労会議に関するオーラルヒストリーが資料11である。対象者の相沢尚夫(大阪製鎖)は同会議初代常任委員を務めた。戦前からのアナーキストでもあり、『日本無政府共産党』(相沢尚夫他著、海燕書房、1974年)という著書もある。渡辺正三(高田アルミ)は同会議執行委員を、斉藤勤一(田辺製薬)は同会議副議長を務めた。

産別会議が分裂して1949年に結成されたナショナルセンターが、新産別(全国産業別労働組合連合)である。新産別は大阪での組織化に失敗したが、新産別に関するオーラルヒストリーとして資料17がある。三戸信人は落合英一や細谷松太とともに産別民主化同盟を旗揚げし、新産別結成後は幹部に就任した。福岡知之は新産別結成準備会に参加したものの結局加盟しなかった松下電器労組出身であり、のちにIMF-JC初代議長に就任した。『国民のための政権戦略』(福岡知之著、21総合研究所、1992年)などの著書もある。岩田秀男は大阪で唯一新産別結成に参加した近畿車輻労組の委員長を務めた。三上修一は鳥津製作所や京都機械が組織していた新産別京都地方連合会に所属していた人物である。『鳥津労働組合二十年略史』(三上修一著、私家版、1964年)という著書もある。

1950年に結成された総評に関するオーラルヒストリーとして、資料20がある。中江平次郎は総同盟大阪連合会副主事を経て総評大阪地評組織部長、地評議長を務めた。中江は『大阪社会労働運動史』編集委員会編集委員長でもあり、いくつかのオーラルヒストリーにもインタビュアーとして参加している。『回想の戦後運動と生活』(中江平次郎、私家版、1997年)などの著書もある。椿繁夫は既に紹介したので省略する。

以上見てきたように、ナショナルセンターに関するオーラルヒストリーは産別会議が中心であり、いわゆる右派組合のオーラルヒストリーは資料30のみである。西川繁一は電産近畿地方協議会の委員長を経て電産スト後に委員長を辞任、関西電力労組の委員長を務めた。さらに、1959年からは全労会議の大阪地方会議議長も務めた。本田精一は総同盟自動車書記長、総同盟大阪自動車運輸労組副書記長を経て総同盟大阪連合会副主事を務めた。1964年の同盟結成の際には大阪同盟の初代副書記長に就任した。

## (2) 産業別労働組合・企業別労働組合

国鉄労働者の労働運動に関するオーラルヒストリーが、資料19である。田村弘は国鉄吹田機関区労組青年部の前身となった青年連盟の結成を主導した。後に、国労大阪支部書記長も務めた。『私の見てきた国鉄労働組合』(田村弘著、大阪社会運動協会(私製)、1952年)などの著書もある。横手真夫は、国労大阪地本副委員長、総評大阪地評副議長を務めるなどしていたが、1953年の年末闘争の責任者として解雇通告を受けた。その後は総評大阪地評副議長として春闘や社会運動を主導した。『完全軍縮と日本』(横手真夫・堀一郎編、原水爆禁止大阪府協議会、1962年)という編著もある。田中包治は、国労南大阪支部から総評地区協に転じ、総評大阪東南地区協の副議長を務めた。

国労の運動にかんしては、資料29も残されている。辻本滋敬は、国鉄労働組合(国労)の民同派

であり、国労大阪地方本部の委員長を務めた後に国労を脱退した。そして、1962年に結成された新国鉄労働組合（新国労）を結成、1965年には委員長に就任した。さらに、1978年には、新国労が1967年に改称した鉄道労働組合（鉄労）の委員長も務めた。小浜忠勝は、1950年に国労大阪支部の執行委員を務めた後、大阪地本の執行委員や総評北大阪地協の役員などを歴任した。坪田太一は、1952年の国労大阪地本の執行委員を振り出しに、1973年には大阪地本の副委員長を務めた。

国鉄とともに官公労労働運動の主役であったのが、全通・電通労働運動である。この全通・電通労働運動に関するオーラルヒストリーが、資料31と資料32である。資料31の福井秀政は、1953年から全通中央執行委員を務めたが、1961年には全通分裂運動を主導し、新郵政大阪中央郵便局労組を結成した。1965年の全日本郵政労働組合（全郵政）結成時には書記長に就任した。『全通と闘う』（福井秀政著、サンケイ新聞社、1979年）という著書もある。土居下範幸は1957年から1964年まで全通大阪地本委員長であったが、1958年に大阪中郵便点闘争の指導者として検挙されたこともある人物である（後に釈放）。益田正は1955年に全通大阪中郵支部書記長、1961年に同副委員長を歴任した。総評北大阪地区協の事務局長も務めた。資料32は、電通労働運動のなかでも<sup>(8)</sup>、反合理化闘争の主舞台となった電信部門の労働運動に関するオーラルヒストリーである。松葉誠一郎は、全電通労組中央支部委員長、全電通近畿地方本部執行委員およびデータ通信支部副委員長などを歴任した。『嵐のなかの電電公社』（松葉誠一郎著・全国電気通信労働組合編、全国電気通信労働組合近畿地方本部、1983年）などの著書もある。

戦後草創期に限定されているが、私鉄労働運動にかんしてもオーラルヒストリーが行われている。それが、私鉄総連の組合員の25%以上を占め、組織率も高かった私鉄総連関西地連の人物を対象とした資料2と資料21である。資料2から見てみよう。帖佐義行は戦前からの労働運動家であり、戦後は交通総連組合員として組合結成を指導した。総評結成後は大阪地評事務局長を17年間務められた。日中友好運動にも取り組み、関西日中貿易促進会の副議長も務めた。さらに、文化運動、在日朝鮮人帰国運動、労働者教育にも積極的に取り組んだ。1968年に大阪地評議長就任後は活動の重点を春闘・秋闘に移していった。津脇喜代男は大阪交通労働組合の結成を指導し、書記局員として活動した後、日本交通運輸労働組合同盟関西地方協議会の書記長、私鉄総連書記長および議長を歴任した。山口丈太郎は阪急（京阪神急行）労組委員長、私鉄関西地連委員長を歴任した後、衆議院議員として活動した。岸本幸喜は山陽労組に所属し、総評結成前後は反執行部派であった。『山陽電鉄労働運動史』1～4巻（岸本幸喜著・山陽電気鉄道労働組合編、山陽電気鉄道労働組合、1978～1990年）の執筆者でもある。壇嘉次は京阪（京阪神急行）労組に所属し、バス部門の要求を私鉄総連内で反映させるべく活動した。

資料21の西村亀久治は阪急（京阪神急行）労働組合の中間派であり、調査部長、副委員長を歴任した後、1960年から17年間にわたって阪急労組の委員長を務めた。『組合幹部として生きて』（西村亀久治著、労働教育センター、1977年）という著書がある。茨木富士一は京阪（京阪神急行）労組の青年部長を務め、総評結成前には他産別の民主化同盟に相当する自主性擁護同盟にも参加してい

(8) 『大阪社会労働運動史』第4巻、pp. 166-173には、電信部門を中心とした電通合理化と反合理化闘争に関して詳細な説明がある。

た。上原富夫は阪急（京阪神急行）労組の副委員長を務めた後、私鉄総連関西地連書記長、大阪労働金庫理事長を歴任した。

大阪は戦前から繊維工場が集積していた地域であり、繊維労働運動が盛んであった。繊維企業労組の主要単組のリーダーたちのオーラルヒストリーが、資料10である。大西優は鐘紡労組委員長、赤坂常之進は東亜紡織労組委員長、西守孫一は帝国産業繊維労組委員長、佐野正三は日紡労組委員長をそれぞれ務めた人物である。大阪は1954年に近江絹糸争議が開始された地域であったが、近江絹糸争議に関するオーラルヒストリーは、編集済みのものが後述する『大阪労働運動史研究』に若干残されているのみであることが惜しまれる。

産別会議の金属労働運動に関するオーラルヒストリーが、資料15である。原全五は共産党の活動家として草創期の労働運動に取り組み、産別金属本部のオルグを務めた。1961年に共産党新綱領に反対して党を除名されたため、社会主義革新運動（社革）に参加した。『大阪の工場街から』（原全五著、柘植書房、1981年）などの著書もある。小森春雄も共産党の活動家として大金属関西地協の常任オルグを務めるなどしたが、原とともに党を除名された後は、社革に参加した。『共産主義運動の原点』（小森春雄著、ウニタ書舗、1986年）などの著書もある。大山清は、岡本工作所労組副委員長として岡本工作所争議を指導した人物であり、産別金属大阪支部常任執行委員を務めた。小西節治は既に紹介したので省略する。

産別会議結成時、大阪での全日本化学労働組合（産別全日化）や薬業労働組合全国協議会（薬全協）の中心的組織であった武田薬品工業従業員組合に関するオーラルヒストリーが、資料16である。喜多幡竜次郎は、武田薬工神崎工場で組合結成を主導した人物であり、全日化関西協議会常任事務局長兼教育宣伝部長などを務めた。磯部直一は、武田薬工労組副委員長、産別関西地方会議常任幹事、全日本化学労組関西協議会執行委員を務めた。戦前来の活動家（旧全協系）であり戦後は共産党オルグでもあった奥野芳三郎は、武田薬工神崎工場の組合結成に協力した後、全日化事務局長などを歴任した。

炭労とともに1950年初頭まで激しい労働運動を展開した産別が、日本電気産業労働組合（電産）である。この電産の大阪における労働運動に関するオーラルヒストリーが、資料18である。甲田一郎は、電産大阪府支部書記長や副委員長を務めた人物であり、1950年の電源スト後の共産派、民同派の対立激化の際には「電産正統確立連盟」の結成に参加した。電産分裂時には、電産自身による組織再編成を提案したものの否決されたため、電産中央執行委員を辞任した。高橋幸一は電産大阪支部委員長を務めた後、電産残務整理委員会委員として電産の残務整理にあたった。その後、大阪市議員（社会党）に転じた。

企業別労働組合のオーラルヒストリーも残されている。住友化学（日新化学）労組は総同盟や共産党だけでなく、戦前の労働運動活動家の働きかけも受けずに結成された労組として知られている。この住友化学労組に関するオーラルヒストリーが、資料28である。古川平治は、1945年に住友化学労組結成を主導した人物であり、結成時には書記局専従役員（事実上の書記長）を務めた。1954～62年には同労組の本部書記長も務めた。岡添榊は、同労組の中央委執行委員、副委員長を歴任した人物である。なお、『大阪社会労働運動史』第4巻には、本オーラルヒストリーを利用した小論が収められており、敗戦直後から昭和30年代までの職場の変化と組合の課題の変遷が簡単に検討されて



いる<sup>(9)</sup>。

### (3) 婦人運動・労働福祉

ここまで、組織別のオーラルヒストリーを紹介してきたが、テーマ別のオーラルヒストリーも残されている。資料7, 22, 23は終戦直後の婦人運動・婦人労働運動、そして資料25は1950年代前半の労働者福祉に関するオーラルヒストリーである。

まず、資料7は社会運動としての婦人運動に関するオーラルヒストリーである。松本貝枝は、戦前来の婦人運動家であり、1945年に結成された建設婦人会の主要メンバーであった。建設婦人会は1946年に羽仁説子や宮本百合子が結成した婦人民主クラブの支部組織（関西婦人クラブ）として発展的に解消されたため、松本は関西婦人クラブ大阪支部長に就任した。上述した大阪婦人懇談会の結成にも参加した。飯田しづえは、松本と同様に関西婦人クラブに参加し、豊中支部長を務めた人物である。「飯田しづえ聞き書きの会」が編んだ『おもしろかってんよ』（飯田しづえ聞き書きの会編、ドメス出版、1993年）というオーラルヒストリーもある。神部敏子は、1949年に結成された関西主婦連合会に参加していたが、1954年に難波美智子とともに会を分裂させ（難波派）、1956年に全大阪主婦連盟を結成した。伍賀借子は、総評大阪地評婦人協で活動した人物である。連合結成後は連合大阪の執行委員、大阪社会運動協会理事などを歴任した。『次代を拓く女たちの運動史』（伍賀借子著、松香堂書店、2002年）などの著書がある。壺内輝子は、総評大阪地評婦人部副部長を務めた人物である。桂あや子は1946年に大阪交通労働組合で初の女性婦人部長に就任した人物である（初代婦人部長は男性）。また、大阪勤労婦人連盟会長も務め、4月10日を婦人デーとすることを主張した。

資料22の安家（山本）周子は、総同盟大阪連合会婦人部長を務めた人物である。前述した桂あや子とともに、日本の婦人デーを4月10日（婦人参政権が初めて行使された日）にすることを主張した。『労働組合活動と婦人の地位』（山本周子著、発行者不明、1949年）という著書もある。飯田好子は阪急労組出身で私鉄総連婦人部長を務めた。1953年には大阪婦人懇談会の結成に参加した。1960年の国際婦人デー50周年国際婦人会議（於：コペンハーゲン）の際には、日本代表の一員として参加した経歴も持つ。西川好子は昭和アルミ労組出身であり、総評大阪地評婦人対策部副部長を務めた。松尾光子は日本アルミ労組出身であり、日労会議婦人部長を務めた。

資料23は大阪勤労婦人連盟（勤婦連）の活動に焦点を絞ったオーラルヒストリーである。関久子（尾崎邦）は大阪教員労組出身で、1946年に結成された勤婦連の初代委員長に就任した。同年結成された関西民主主義科学者協議会にも参加した。桂あや子は既に紹介したので省略する。

資料25は大阪の労働者福祉、とくに生活協同組合（生協）と労働者福祉協議会に関するオーラルヒストリーである。井川章は武田薬品工業労組の執行委員を務めながら武田薬工生協を設立した。全大阪生協協議会（後に全大阪生協連合会）の設立、運営にも関与した。大阪府生活協同組合協議会会長、中央労福協副会長、日本生活協同組合連合会副会長も歴任した。『うねりを超えて』（井川章著、コープ出版、2006年）という著書がある。山上義廣は1961年に結成された大阪市立大学生協

(9) 『大阪社会労働運動史』第4巻、pp. 162-166。

の初代専務理事、大阪府生活協同組合連合会の専務理事などを務めた。中田文治は近鉄労組を経て  
私鉄関西地連などで活動した後、全大阪労働生活協同組合の理事長や大阪労福協役員を歴任した。  
柴田禎男は大阪労福協事務局長であり、大阪福祉対策協議会の年史編集に従事した。

## 2-2 労働政治・労働行政

労働政治ないしは労働行政に関するオーラルヒストリーが、資料3, 4, 14, 24である。資料3  
の末中勘三郎は戦前来の労働運動家であり、大阪機械労働組合、関西労働連合会、大阪硝子工組合  
などで活動し、日本労働組合総連合（総連合）結成にも参加し、要職を歴任した。府会議員、市会  
議員にも立候補し続けていたが、総連合が日本主義化していくなか、1936年の大阪市議選で日本主  
義的政治主張を曖昧にする態度で選挙戦に臨んだことが問題となり、総連合大阪府連の職を辞する  
ことを余儀なくされた。戦後は府議会議員を務めた。

資料4は婦人運動家であった古野しくのオーラルヒストリーである<sup>(10)</sup>。大政翼賛会大阪支部協議  
会議員であった古野は、1946年の日本主婦の会結成に参加した。1947年には大阪市会議員（社会党、  
後に民社党）に当選し、以後20年間議員を務めた。『みなさまのご健康を希って』（古野周蔵・古野  
しく著、私家版、1962年）という共著書もある。

資料14は、占領下の労働行政に関するオーラルヒストリーである。後藤清は、大阪地方労働委員  
会初代委員であり、1947年の全連大阪地協による地労委への調停申請を受理すべきとの議論を展開  
した人物である（後に調停は中労委へ移管）。労働法にかんする数多くの著書もある。山口武は枚方  
労政事務所所長を務めた後、大阪府労政課に転じ、軍政部との連絡係を担当した。『労使関係の原点』  
（山口武著、公報史料センター大阪事務所、1971年）などの著書もある。片岡重治郎は地労委の審査  
課長を、大森一男は天六日雇労働署で進駐軍の労務調達などをそれぞれ担当した。井岡大治は既に  
紹介したので省略する。

資料24は社会党の選挙に関して労組出身議員に聞き取りをしたものであるが、村尾重雄、椿繁夫  
ともに既に紹介したので省略する。

## 2-3 学生運動・平和運動・文化運動

資料1は、戦前のプロレタリア文化運動活動家であった大岡欽治のオーラルヒストリーである。  
大岡は戦旗座での活動を経て、1935年の協同劇団結成に参加した。戦後は演芸評論家・演出家とし  
て活動するかたわら、新安保条約反対運動などの社会運動にも積極的に関わった。『関西新劇史』  
（大岡欽治著、東方出版、1991年）などの著書もある。

平和運動に関するオーラルヒストリーとして、資料9, 13がある。資料9から見てみよう。大阪  
市大教員であった内海義夫は平和友の会などに所属して日中友好運動、原水爆禁止運動などに取り  
組んだ。『労働時間と労働組合』（内海義夫著、労働旬報社、1975年）などの著書もある。山口圭一  
は1950年に結成された大阪平和を守る会のメンバーとして日中友好運動を推進した。雨宮礼三は、

---

(10) 『大阪社会労働運動史』には、「古野しく」という人物が散見されるが、「古野しく」の誤記と思われる。

日中友好協会大阪府連事務局長を務め、日中友好運動に取り組んだ。1966年の日中友好協会分裂時には日中友好協会（正統）の大阪府本部の組織化を主導した。筒井明は大阪地評の一員として山口、雨宮らとともに日中友好運動に携わった。佐藤公次は汽車労組大阪動力・電気工場（川崎重工大阪工場）の支部長を務めた後、平和運動に転じ、基地反対懇談会事務局、総評大阪地方オルグを経て総評調査資料室長を務めた。『米軍政管理と平和運動』（佐藤公次編著、せせらぎ出版、1991年）などの著書もある。帖佐義行は既に紹介したので省略する。

資料13の天津静夫は、戦後復興期の労働組合による平和運動の推進組織であった大阪地方民主主義擁護同盟準備会の事務局長を務めた。共産党の六全協後、共産党大阪府委員会委員に選出されたが、1961年の党の新綱領決定後に除名処分を受けた。

資料26は大阪の学生運動に関するオーラルヒストリーである。大門昌博は、大阪市大入学後、反戦学生同盟関西地方委員会書記長を務めた。1956年に再入学後、大阪府学連委員長も務めた。鍋野市蔵は1959年の安保闘争当時の府学連委員長（主流派）であったが、全学連の路線対立の影響を受けて反主流派の井上淳一に委員長の座を譲った。井上は「学大スパイ事件」<sup>(11)</sup>の責任を問われ、逮捕された経歴もある。

### 3 雑誌連載と未公開音声資料

先述したように、大阪労働運動史研究会（以下、研究会）によるオーラルヒストリーが、研究会が発行していた『大阪労働運動史研究』（以下、『研究』）に残されている。研究会は、1928年の三一五事件の関係者によって結成された旧友クラブを母体として、「主として運動体験者の聞き書・手記（記録）に基づいて研究し、これを記録、保存する」ことを目的に掲げ、1980年11月に設立された。研究会は1986年末までに『研究』を19号（準備号～第18号）発行し続けたが、次第に運営赤字が増加したこと、研究会の中心人物であった高田鑛造が体調を崩したことなどを理由に、同年末に活動を停止した。その後、1990年に渡部徹を代表世話人として第二次大阪労働運動史研究会として活動を再開したが、『研究』を再刊第1号～第3号まで発行した後、再び活動を停止した<sup>(12)</sup>。

旧友クラブ・研究会が行ってきたような草の根のオーラルヒストリーは、古くは史談会と呼ばれ、各地域で広がっていたが、労働史関連でこのような運動が続けられていた事実の特筆に値する。しかし、以下に見るように、研究会活動の全てが記録されたわけではなく、記録が残るものも編集が加えられたと見られるものがほとんどである。

表2は、旧友クラブ・研究会が開催した例会の内容と、それらの掲載状況をまとめたものである。一見して明らかなように、報告内容がオーラルヒストリーとして残されているのはわずかであり、編集が加えられて掲載されたものも約3分の1にとどまっている。これらも含めて、研究会発足後

(11) 1959年11月に、大阪府警の巡査が学生自治会役員にスパイ工作を行っていたことが発覚し、巡査が学生たちに連行、糾弾された事件。

(12) 研究会の活動経緯については、大阪労働運動史研究会編・発行『大阪労働運動史研究』各号による。引用は『大阪労働運動史研究』創刊号（1980年12月）、p. 2。

表2 旧友クラブ・大阪労働運動史研究会例会テーマと内容掲載リスト

No.	開催日付	テーマ	メインゲスト	オーラルヒストリータイトル・掲載号	報告内容掲載号	備考
1	1977年5月11日	大阪旧友クラブ結成,出席者各人の略歴と自己紹介				詳細不明
2	1977年12月11日	関西合同労組と乾鉄織スト	市来寿春			詳細不明
3	1978年1月22日	警察,留置場,未決監,刑務所,天皇制				詳細不明
4	1978年3月5日	無産青年同盟の活動と共青	坂和唯一			詳細不明
5	1978年4月9日	春日庄次郎の予備尋問調書から	高田鐵造			詳細不明
6	1978年5月14日	水平社運動と日本共産党	木村京太郎			詳細不明
7	1978年6月18日	新入人会から4.16検挙まで	松本広治			詳細不明
8	1978年9月17日	レフト会議報告書の問題点	平井重太郎			詳細不明
9	1978年10月15日	戦前における香川県の農民運動	羽原正一			詳細不明
10	1978年11月12日	海員刷新会と田中松太郎	鳥越巖			詳細不明
11	1978年12月3日	ゼネストと全協	宮本正男			詳細不明
12	1979年1月21日	ケート時代の体験	世古重郎		第6号,1982年7月31日,pp. 3-14	
13	1979年2月18日	玉川町時代の思い出	森本幹一	「玉川町時代の思い出—旧評議会本部跡を訪ねて—」第9号,1983年6月30日,pp. 24-30		(聞き手)高田鐵造
14	1979年3月11日	大衆芸能と戦前のプロ文化運動	北野照雄		第4号,1981年12月15日,pp. 14-18	詳細不明
15	1979年4月29日	3.15における袴田里見の行動	高田鐵造			テープあり(表4)
16	1979年5月20日	高橋貞樹と小見山富恵	小嶋克己			
17	1979年6月24日	三菱・川崎両造船の大争議(記録映画併映)	武田芳一,岸本邦巳			テープあり(表4)
18	1979年7月22日	裏方一代記	大牧久次郎	「<聞き書>裏方一代記 大牧久次郎」準備号,1989年10月25日,p. 10;「<聞き書>裏方一代記 大牧久次郎」創刊号,1985年12月25日,pp. 41-48		(聞き手)高田鐵造
19	1979年8月26日	3.15事件春日庄次郎の検事聴取書	高田鐵造			詳細不明
20	1979年9月23日	大阪商大事件の回想	山崎隆二			テープあり(表4)
21	1979年10月21日	摂津米騒動の顛末	阿部良琴			詳細不明
22	1979年12月19日	3.15事件大阪地裁の公判調書	坂和唯一			詳細不明
23	1980年3月2日	旧評議会大阪電気労働組合について	内田寛			テープあり(表4)
24	1980年4月20日	敗戦前後の大阪刑務所	須藤和光		準備号,1980年10月25日,p. 8;第4号,1981年12月15日,pp. 3-12	
25	1980年5月25日	浜松・日本楽器争議の研究	大庭伸介		準備号,1980年10月25日,p. 7	テープあり(表4)
26	1980年6月29日	日本共産主義者団とオノQ	福本正夫		準備号,1980年10月25日,p. 6	テープあり(表4)
27	1980年8月17日	産別会議の結成から解体まで	小西節治		準備号,1980年10月25日,p. 5;第2号,1981年4月10日,pp. 12-19	
28	1980年9月15日	京大ケルンと人民戦線(1)	小野義彦		創刊号,1980年12月25日,p. 53;第2号,1981年4月10日,pp. 3-11;第3号,1981年8月20日,pp. 19-31	
29	1980年10月5日	反戦エスバランチスト・長谷川テル	宮本正男		創刊号,1980年12月25日,p. 52	テープあり(表4)
30	1980年11月16日	淀川製鋼でのレッドバナー反対闘争	果張秀夫		創刊号,1980年12月25日,p. 51;第2号,1981年4月10日,pp. 20-29	
31	1980年12月7日	海員ゼネストの回想	白川芳松		第3号,1981年8月20日,pp. 3-10;第4号,1981年12月15日,pp. 26-34	
32	1981年1月25日	戦前の合法左翼労働運動	東久太郎		第3号,1981年8月20日,pp. 11-18	
33	1981年2月22日	電産のレッドバナー反対闘争	北田辰之進			テープあり(表4)
34	1981年3月22日	3-15青年同盟の公刊	坂和唯一			
35	1981年4月29日	小岩井浄氏を語る	細迫朝夫		第7号,1982年12月25日,pp. 12-17	
36	1981年5月24日	逸見直造・吉三父子を偲んで	白井新平		第4号,1981年12月15日,pp. 20-24	
37	1981年6月28日	昭和5年の鐘紡争議	井家上専		第5号,1982年3月31日,pp. 14-22	
38	1981年7月26日	1930年代の日本共産党	渡部徹		第5号,1982年3月31日,pp. 3-13	
39	1981年8月23日	武田薬品従組日共派の盛衰	喜多嶋龍次郎			
40	1981年9月27日	枚方事件と日共の軍事闘争	脇田憲一		第5号,1982年3月31日,pp. 24-36	
41	1981年10月25日	戦前における労働救援活動	福本義雄			
42	1981年11月22日	辰巳経世とその周辺	奥野芳三郎		第14号,1985年1月30日,pp. 18-22	
43	1981年12月20日	名もなき者の記録	平井巳之介			テープあり(表4)
44	1982年1月24日	水崎町の宿 宮本三郎				テープあり(表4)
45	1982年2月28日	東成診療所と労働救援活動	桑原康則		第6号,1982年7月31日,pp. 32-36	
46	1982年3月28日	海上労働運動の特殊性	白川芳松			
47	1982年4月25日	京大ケルンと人民戦線(2)	小野義彦		第10号,1983年12月31日,pp. 3-15;第12号,1984年6月30日,pp. 24-45	
48	1982年5月23日	貴司山治の実績と人民戦線	宮西直輝		第7号,1982年12月25日,pp. 3-11	
49	1982年6月27日	岩井彌次を語る	堀口恒次	「民主医療の父・岩井彌次氏を語る」第8号,1983年3月1日,pp. 24-39		堀口恒次,小倉依子,堀江社一,兄玉誠による座談
50	1982年7月18日	国際政治と反核運動(第50回例会記念講演)	勝部元			
51	1982年9月26日	京都の新産別運動	三上勝一			

52	1982年10月24日	日共創立過程における「君主制の撤廃問題」	大森実			
53	1982年11月28日	反戦婦人誌「かひがね」	寺村徹枝		第9号,1983年6月30日,pp. 3-22	
54	1982年12月19日	反戦前後から2-1スリまで	小野義彦			詳細不明
55	1983年1月23日	人形芝居の歴史	阪本一房		第11号,1984年4月15日,pp. 36-43	
56	1983年2月7日	沖繩戦捕虜のストライキ	宮本正男			
57	1983年3月27日	「戦旗」大阪支局のこと	児玉誠			
58	1983年4月29日	国労攻撃と総評運動の危機	森村敏学			
59	1983年5月29日	短詩型文学運動への弾圧	田島静香		第11号,1984年4月15日,pp. 28-35	
60	1983年6月26日	農民運動のむかしといま	西尾治郎,平山口和男		第10号,1983年12月31日,pp. 16-37	
61	1983年7月24日	明治期大阪の社会運動	荒木傳		第14号,1985年1月30日,pp. 3-17	
62	1983年8月28日	消費者運動の多面性	下垣内博			
63	1983年9月25日	赤色労働組合問題の周辺	小西節治		第12号,1984年6月30日,pp. 3-12	
64	1983年10月23日	人民戦線運動の諸問題	佐和慶太郎,亀山幸三		第13号,1984年9月30日,pp. 3-11(佐和),pp. 12-20(亀山)	
65	1983年11月27日	戦後左翼の遷移をめぐる	脇田憲一			
66	1983年12月25日	「50年問題」と今日の共産党	小森春雄		第11号,1984年4月15日,pp. 3-14;第12号,1984年6月30日,pp. 14-22;第13号,1984年9月30日,pp. 22-36	
67	1984年1月22日	私たちにとって社会主義とは何であったか	座談会			
68	1984年2月26日	戦前における労働者教育と大阪労働学校	委島南海士		第15号,1985年6月30日,pp. 3-8	
69	1984年3月25日	敗戦直後の日共大阪地方委	馬淵薫			
70	1984年4月22日	戦前日本共産党の前身	高田謙造			
71	1984年5月27日	ゼネモートの再検討	掛谷幸平			
72	1984年6月24日	八木信一と大阪の労働運動	八木鶴子,久保在久			
73	1984年7月22日	大和製鋼における生産管理闘争	朝山峻		第16号,1985年12月25日,pp. 3-12	
74	1984年8月26日	尼鋼争議をふりかえって	平坂春雄		第16号,1985年12月25日,pp. 34-47	
75	1984年9月23日	鉄鋼再編成による資本の攻勢と大同鋼板争議	杉本昭典	「鉄鋼第一次合理化闘争と大同鋼板闘争」第16号,1985年12月25日,pp. 14-32		長文の質疑応答記録(pp. 25-32)
76	1984年10月28日	大特の生産闘争と首切反対闘争勝利	中野邦弘,泉張秀夫	「『生産闘争』をめぐる」第17号,1986年8月31日,pp. 38-47	第17号,1986年8月31日,pp. 22-30(中野),pp. 31-37	座談会
77	1984年11月25日	私鉄関西地連と大阪総評の形成過程	帖佐義行			
78	1984年12月16日	戦後日本共産党をめぐる諸問題	亀山幸三			
79	1985年1月27日	「プロレタリア独裁」をめぐる	新年座談会			
80	1985年2月24日	近江絹糸争議とは何であったか	辻保治,入江砂忠	「質疑応答」第15号,1985年6月30日,pp. 23-32	第15号,1985年6月30日,pp. 10-18(辻),pp. 20-23(入江)	長文の質疑応答記録
81	1985年3月24日	プロ独裁と「全人民国家」論	小野義彦		第18号,1986年12月31日,pp. 12-19,33	
82	1985年4月28日	現時点から見た「27年及び32年両テーゼ」	渡部徹		第18号,1986年12月31日,pp. 3-10	
83	1985年5月26日	運動史研究会第15回関西会員懇談会				
84	1985年6月23日	日本共産党綱領批判	松江澄		第18号,1986年12月31日,pp. 20-33	
85	1985年7月28日	全日鉄と関西産別をめぐる諸問題	渡辺忠	「全鉄労と関西産別をめぐる諸問題」第17号,1986年8月31日,pp. 3-20		(主な聞き手)脇田憲一
86	1985年8月15日	四十年前の前八月十五日をどうしていたか	会員座談会			
87	1985年9月22日	在日朝鮮人と日本の労働運動	張錠寿			
88	1985年10月27日	ブルガリア招待旅行から帰って	宝木武則,藤井英男			
89	1985年11月24日	運動史研究会第16回関西会員懇談会	伊藤晃			
90	1986年1月24日	1986年新年会員懇談会				
91	1986年4月27日	運動史研究会第17回関西会員懇談会				
92	1986年5月25日	官僚主義の克服について	藤原吉夫			
93	1986年7月4日	全般的な過剰恐慌としての世界恐慌	内田種吉			詳細不明
94	1990年9月9日	総同盟第一次分裂と評議会をめぐる問題	渡部徹		再刊第1号,1991年1月27日,pp. 3-4(要約のみ)	第二次研究会第1回例会
95	1990年11月11日	六十年安保闘争とその教訓	小森春雄		再刊第1号,1991年1月27日,pp. 5-6(要約のみ)	第二次研究会第2回例会
96	1991年1月27日	大阪の勤務評定(勤評)反対闘争	東谷敏雄		再刊第2号,1991年7月21日,pp. 6-7(要約のみ)	第二次研究会第3回例会
97	1991年3月24日	「三一五事件被告,高田謙造氏の半生」自伝「一粒の種」刊行を機に	久保在久		再刊第2号,1991年7月21日,pp. 7-8(要約のみ)	第二次研究会第4回例会
98	1991年6月16日	1930年代の日本文化と日本人民戦線	荒木傳		再刊第3号,1991年11月21日,pp. 3-4(要約のみ)	第二次研究会第5回例会
99	1991年7月21日	戦後大阪の自治体労働運動の概要	鈴木美雅		再刊第3号,1991年11月21日,pp. 5-6(要約のみ)	第二次研究会第6回例会

資料) 「大阪労働運動史研究」各号より作成。

注1) No. 1~31は前身組織の旧友クラブ主催である。座談や長文の質疑応答もオーラルヒストリーに含めた。

注2) 報告内容掲載号には、講演内容のテープを起こしたものの、加筆修正をくわえたものが混在しているが、そのままとした。

注3) 詳細不明とは、「大阪労働運動史研究」にオーラルヒストリー、報告内容、例会報告のいずれも掲載が確認できなかったものである。

表3 『大阪労働運動史研究』掲載オーラルヒストリーリスト（例会分を除く）

No.	タイトル	聞き手	巻号	発行年月	掲載頁	備考
1	松下労組の結成前後 —初代組合長朝日見端氏に聞く—	広川禎秀, 脇田憲一	6	1982年7月31日	pp. 16-24	
2	煙突男顔未記	高田鑑造	6	1982年7月31日	pp. 38-43	
3	大阪の運動と人語る	山内みな, 鍋山歌子, 福永操, 大竹一灯子	7	1982年12月25日	pp. 28-36	座談会
4	辰巳経世の足跡をたどる	灰井正二	14	1985年1月30日	pp. 30-33	
5	日共大阪支部の結成と鍋山貞親	松葉清次郎, 鍋山貞親	17	1986年8月31日	pp. 49-58	対談

資料) 『大阪労働運動史研究』各号より作成。

注) 対座談会, 対談も一覧に含めた。

表4 インタビュー記録のカセットテープリスト

No.	タイトル	日付	聞き手	例会
1	戦後活動家の会結成準備会	1979年2月5日		×
2	旧友クラブ例会(第15回) 高田鑑造 3・15検挙前後における袴田里見の行動	1979年4月29日		○
3	森本幹一聴取調査	1979年5月3日		×
4	椿繁夫聴取調査NO.1 生い立ち 東京時代	1979年6月23日		×
5	椿繁夫聴取調査NO.2 田万との関係, 2.26事件, 松本皮革争議, 水平社, 社大党の門戸開放, 人民戦線, 労働雑誌, 産報, 戦時下の運動	1979年6月23日		×
6	旧友クラブ例会(第17回) 武田芳一・岸本邦巳「三菱・川崎両造船の大争議」	1979年6月24日		○
7	帖佐義行聴取調査	1979年7月28日		×
8	戦後活動家の会発足総会並びに懇親会	1979年9月7日		×
9	旧友クラブ例会(第20回) 商大事件	1979年9月23日		○
10	鉢金一夫聴取調査NO.1	1979年9月24日		×
11	西山熊太郎聴取調査NO.1労働資料第7回聴取調査	1979年10月27日		×
12	江西一三聴取調査	1980年2月17日		×
13	旧友クラブ例会(第23回) 内田寛氏	1980年3月2日		○
14	旧友クラブ例会(第25回) 日本楽器争議	1980年5月25日		○
15	宇田誠一郎 聴取調査	1980年6月28日		×
16	旧友クラブ例会 福本正夫「日本共産主義者団について」	1980年6月29日		○
17	旧友クラブ例会(第29回)「反戦のエスベランチスト・長谷川テル」宮本正男	1980年10月5日		○
18	大阪労働運動史研究会(第33回)北田辰之進氏 電産のレノバ反対復興闘争	1981年2月22日		○
19	中江平次郎聴取調査(西村班第3回執筆者会議)	1981年8月29日		×
20	大阪労働運動史研究会(第43回)平井巳之助	1981年12月20日		○
21	大阪労働運動史研究会(第44回)宮本三郎「水崎町の宿」	1982年1月24日		○
22	北田辰之進聴取調査 山本正之	1982年2月28日		×
23	桑島南海聴取調査 木村班第7回会議 住友職工業成所および労働者教育	1982年4月3日		×
24	江西一三聴取調査 宮本三郎氏同席	1983年8月24日	渡部徹, 久保在久, 中江平次郎, 北橋正一, 原はるみ	×
25	山崎宗太郎ききとり	1983年11月25日		×
26	大岡欽治聴取調査 能塚・北橋	1983年12月12日		×
27	北野照雄聴取調査 戦後の文化運動	1984年3月24日		×
28	大岡欽治聴取調査第3回	1985年1月23日		×
29	総評結成と総同盟の分裂 中江平次郎	1985年12月20日		×
30	東谷敏雄聴取調査 中江 西村 辻橋	1986年2月4日		×
31	東谷敏雄氏聴き取り	1986年2月4日	中江平次郎, 西村裕通, 辻橋茂	×
32	高田鑑造 佐川忠一 渡辺 久保	1986年5月21日		×
33	鈴木実	1987年9月7日		×
34	労働衛生運動 丸山博 東田敏男 三浦武夫 水野洋	1987年12月11日		×
35	松下電器産業の概況報告 青木昇一	1988年7月4日		×
36	昭和40年代の技術革新とその対応 クボタ	1992年6月5日	石原利昭, 森本実, 中江平次郎, 中岡哲郎, 広田義人, 佐々木淳	×
37	光洋精工	1992年7月3日		×
38	日立造船	1992年7月3日		×
39	国労 宮原 中島 大矢氏に聞く(地労委提訴 勝訴)	1998年12月10日	田沢定男, 久保在久	×
40	昭和30年代の日産自動車の技術革新と労務管理	日時不明		×
41	渡辺忠聴取調査	日時不明		×

資料) 筆者作成。

注) タイトルその他の表記は原資料にしたがった。

の例会の概要は原則的に例会報告として各回1頁分ずつ掲載されているが、旧友クラブ時代のものは内容すら不明のものもある。続いて表3は、研究会が例会以外で行ったオーラルヒストリーをまとめたものである。大部分が10頁以内と短く、編集されたものであると推定できる。いずれにせよ、『研究』のオーラルヒストリーは、雑誌に載せるために編集された記録であり、抜粋された記録にとどまっていると言える。

また、表1と表2・表3を比較すると、表1にまとめたエル・ライブラリー所蔵のオーラルヒストリーは旧友クラブ・研究会のそれとは全く別個のものであること、すなわち表1は全て未公刊資料であることが改めてわかる。なお、『研究』は準備号～再刊第3号までエル・ライブラリーに所蔵されている。

ところで、エル・ライブラリーには、インタビューを録音したカセットテープも残されている。これをリスト化したものが、表4である。これらの一部は、旧友クラブ・研究会の例会を録音したものであり、なかには『研究』に報告内容が掲載されていないものもある（表2参照）。これらのテープは劣化が進んでいると見られるものもあり、再生可能か否かは未確認であるが、再生可能であれば未公開のオーラルヒストリーが発掘される可能性がある。

さらに表1～3と表4を比較してみると、旧友クラブ・研究会の例会を記録した10本を除いて、表4のカセットテープは表1～3のものとは全く別個のものであることがわかる。このことは、インタビュー記録のカセットテープのうち、冊子化されたものや『研究』に掲載されたものの大部分は破棄されてしまっていることを示唆している。ただし、他にもカセットテープが所蔵されている可能性は否定できない。この点に関しては再調査したいと考えている。

## おわりに

本稿では、財団法人・大阪社会運動協会で実施され、現在、エル・ライブラリー（大阪産業労働資料館）にて保存されている社会労働運動関係のオーラルヒストリーの紹介をおこなってきた。本稿は資料の紹介を目的としているが、今後、労働史の研究者がこれらのオーラルヒストリーを使って論文を書くことを期待している。

紹介してきたオーラルヒストリーは、戦前から戦後に続く関西圏の社会労働運動史を研究するうえで貴重な歴史資料であろう。戦前の活動に関しては、語り手の多くがお亡くなりになっていることを考えると、このオーラルヒストリーは失うことができない貴重な歴史資料なのである。関西圏における社会運動・労働組合運動史の特徴とは何かを知る研究は、今後もっと開拓されるべき研究テーマである。

最後に、歴史資料という社会的共有財産に対する無理解が進む中で、それらの保存と整理に労力を惜しまないエル・ライブラリーの活動に一研究者として感謝を申し上げたい。現在、エル・ライブラリーはサポート会員という制度で図書館の運営を行っておられる（詳しくは、<http://shaunkyo.jp/support.html>参照）。本来ならば、公共性の高い事業は国や地方自治体が大規模な支援を行うべきであると我々は

考えているが、残念ながらそのような支援を得られなくなるという厳しい状況である<sup>(13)</sup>。しかし一方で、確かに厳しい状況であるが、サポート会員による図書館の運営、つまり有志による歴史資料の保存は未来に向けた明るい試みであると言えよう。なぜなら、歴史を支える個人の力が集まって歴史資料がつくられ、その結果として未来が構想されるという歴史学の本来の姿をそこに発見することができるからである。

(しまにし・ともき 立教大学経済学部助教)

(うめざき・おさむ 法政大学キャリアデザイン学部准教授)

(なぐも・ちあき 連合総合生活開発研究所研究員)

\*本稿は日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(C))「戦後日本の中小企業における労使交渉の制度化—オーラルヒストリーによる検証の試み—」(課題番号:20530314, 研究代表者:梅崎修)の研究成果の一部である。

#### 参考文献

- 伊藤隆「第1章 歴史研究とオーラルヒストリー」法政大学大原社会問題研究所編『人文・社会科学  
研究とオーラル・ヒストリー』御茶の水書房 2009
- 梅崎修「第7章 労働研究とオーラルヒストリー」法政大学大原社会問題研究所編『人文・社会科学  
研究とオーラル・ヒストリー』御茶の水書房 2009
- 大阪社会労働運動史編集委員会編『大阪社会労働運動史』(第1～9巻)1986～2009
- 清水唯一朗「日本におけるオーラルヒストリー—その現状と課題, 方法論—」(KEIO-GSEC  
CRONOS WPs 03-004) 2003
- 日本労働研究機構編『戦後労働運動の歴史: 分裂と統一』日本労働研究機構 2003
- 法政大学大原社会問題研究所編『証言 産別会議の誕生』総合労働研究所 1996
- 『証言 産別会議の運動』御茶の水書房 2000
- 『人文・社会科学研究とオーラル・ヒストリー』御茶の水書房 2009
- 御厨貴『オーラル・ヒストリー—現代史のための口述記録』中央公論新社 2002
- 編『オーラルヒストリー入門』岩波書店 2007
- 山本潔「第6章 労働調査(聴取り調査)とオーラルヒストリー」法政大学大原社会問題研究所編  
『人文・社会科学研究とオーラル・ヒストリー』御茶の水書房 2009
- 吉田健二「大原社会問題研究所のオーラルヒストリー」法政大学大原社会問題研究所編『人文・社会  
科学研究とオーラル・ヒストリー』御茶の水書房 2009
- 労働史・史料研究会『労働史・史料研究会』科研費報告書 2008
- Thompson, Paul. *The Voice of the Past: Oral History* 3rd Edition, Oxford University Press, 2000
- 酒井順子訳『記憶から歴史へ—オーラルヒストリーの世界』青木書店 2002
- Thompson, Paul. 「オーラルヒストリーの可能性と日本との関連」『三田学会雑誌』第96巻第3号,  
2003

(13) 大阪社会運動協会は、2000年4月以来、「大阪府労働情報総合プラザ」の運営を府から委託され、人件費の大幅削減ときめ細かなサービスを実現して大阪府直営時代より4倍の利用者増加という成果をあげてきたが、2008年に大阪府知事の財政再建「維新」案が提案され、プラザ廃止と社運協資料室への補助金全額カットが決まった。